

Journal of Chubu University Education

No. 20
2020

【教育資料】

「特別支援学校教職インターンシップ」の意義と課題

ー小学校における学校インターンシップとの比較からー 古市真智子・伊藤佐奈美

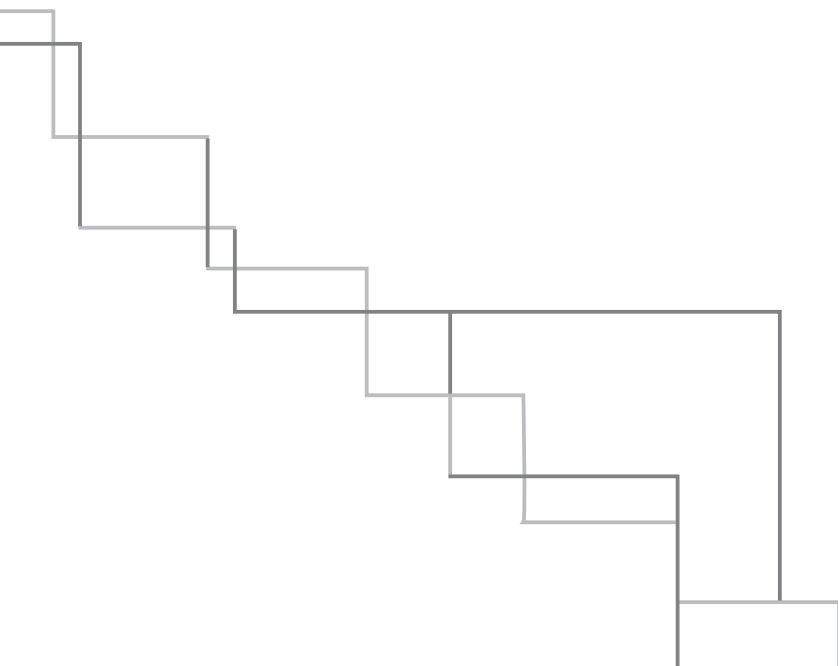
【Resources】

Meanings and Issues of Special School Internship

in each Training Program for Special Needs Education:

Comparison with Elementary School Internship

..... FURUICHI Machiko and ITO Sanami



「特別支援学校教職インターンシップ」の意義と課題

ー小学校における学校インターンシップとの比較からー

古市真智子^{*1}・伊藤佐奈美^{*2}

1 はじめに

学校現場の活動を体験させる「学校インターンシップ」（学校体験活動）は、2019年度から教職課程の科目として位置づけられるようになり、教育実習との役割分担を明確にしたうえでその一部として認められることとなった（文部科学省、2017）。

以前から、「学校インターンシップ」は各大学で実が図られてきており、その意義と成果は多くの報告・研究によって示されてきている。しかし、それらは小中学校教職課程に関するものが中心であり、特別支援学校教職課程に焦点を当てたものは見当たらない。特別支援学校教職課程における特別支援学校でのインターンシップ活動については、小中学校での活動とは異なる特有の意義や課題があると考えられるものの、ほとんど検討されてこなかった現状がある。

特別支援学校教職課程の学生が教育実習前に障害のある子どもとかかわる体験をすることの効果や、教育現場での実践に対する学生のニーズは確認されてきた。田中ら（2009）が障害児教育専修の学部学生1年～4年生に「障害のある子どもとかかわるときに、障害のない子ども達に対する時とは異なる特別な技能（指導法やかかわり方など）を習得した機会」について調査したところ、9割以上の学生が「ボランティア活動を通して身についた」と回答しており、当学科の学生が主体となって定期的に開催しているボランティア活動がこれに当たると考えられた。また、船橋（2014）が特別支援学校教員養成課程の学部学生1年～4年生に行った授業や活動の要望についての調査では、「教育現場に関連する内容・実践」への学びのニーズが高いことが示され、特に3年生では全員が「教育現場に訪問して、実践経験を積むような授業が必要」と回答している。

本学科では、特別支援学校教職課程の課外活動として、特別支援学校でインターンシップを行う「特別支援学校教職インターンシップ（以下、「教職インターンシップ」と略す）」を2017年度から行っている。古市・伊藤（2019）では、開始から3年間の「教職インターンシップ」活動の概要及び参加学生やインター

ンシップ受け入れ校の意見を報告するとともに、これらをもとに、「教職インターンシップ」の意義や課題を探った。その結果、教育職員免許法施行規則に規定する各事項について修得すべき資質能力を示した「大学が教職課程を編成するに当たり参考とする指針（教職課程コアカリキュラム）」（教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会、2017）において、「学校体験活動」の到達目標として示されているすべての観点をほぼ達成できていることや、参加学生に良い変化がみられることが確認できた。また、「教職インターンシップ」には、ボランティアや小中学校教職課程におけるインターンシップとは異なる特有の意義や成果がある可能性が示された。

そこで本稿では、2019年度に「教職インターンシップ」に参加した学生のふりかえりから、特別支援学校教職課程における特別支援学校でのインターンシップに特有の意義と成果を検討する。

2 方法

2.1 2019年度「教職インターンシップ」の概要

2019年度の「教職インターンシップ」は、特別支援学校教職課程履修者7名を対象に実施した。時期と回数は、9月から12月までの火曜日のうち、実習校から指定された10回とし、実習先は、愛知県内特別支援学校（知的障害特別支援学校2校、肢体不自由特別支援学校3校）である。2017年度の開始から3年目となった2019年度は、受け入れ校の理解を得て手続きがスムーズに進み、7月中には事前打ち合わせが終了し、実習日時、回数の設定を行うことができた。学生の実習内容も授業補助や教材づくり、環境整備など学校の中の様々な業務を体験することができ、教育実習の前に「特別支援学校を体験する」という当初の目的をほぼ達成することができたと考えている。

2.2 ふりかえり調査の実施

昨年度は、2018年度に「教職インターンシップ」を実施した学生を対象に、「教職インターンシップの経験は教育実習を行ううえで役に立ったか」、「教師の仕

*1 現代教育学部 現代教育学科 准教授

*2 現代教育学部 現代教育学科 教授

事や特別支援学校に関する知識が学べたか」などについての聴き取り調査を行った（古市・伊藤，2019）。学生たちは、それぞれに「教職インターンシップ」における学びを実感していることがわかり、その意義や成果を確認することができた。しかし、どのような点において成果が得られたのか、特別支援学校におけるインターンシップ特有の意義や課題は何か、などについての詳細な検討までには至らなかった。

そこで、今年度のふりかえり調査では、「教職インターンシップ」の目的に関するものと自分自身の態度や理解の変容に関するものに調査項目を分け、学生自身がそれぞれの項目に対する達成度を自己評価する調査を実施し、その結果を分析・検討することにした。

2.2.1 調査方法

1) 対象学生

2019年度の特別支援学校教職課程履修生 7 名

2) 実施期間

2020年 8 月19日から 8 月23日まで

3) 配付回収

Google Suite for Educationに含まれるClassroom内に回答フォームを作成し、学生に通知することで配布した。学生が回答フォームに入力し、その後送信してもらう方法でClassroom内で回収した。

4) 倫理的配慮

学生が回答を始める際に、回答内容を匿名化したうえで公表することへの同意を得た。また、回答結果を集約した形で、「教育実習指導」の授業内で学生にフィードバックし、「教職インターンシップ」のふりかえりを行う。

2.2.2 ふりかえり調査の観点及び項目

2018年度に「教職インターンシップ」に参加した学生の聴き取り調査や活動報告書から、「教職インターンシップの意義」と「活動への参加による学生の良い変化」を確認することができた（古市・伊藤，2019）。2019年度は「教職インターンシップの目的」及び「自分自身の態度や理解の変容」の 2 つの観点から、それぞれの観点に属する項目を以下のように作成し、調査を行った。

1) 「教職インターンシップの目的」の項目

「教職インターンシップの目的」に関する項目は、峯村ら（2019）が、2018年に教員養成課程を設置する大学を対象に行った「学校を体験する」活動の調査のうち「科目の目的」の項目をもとに、学生向けの質問項目に作成し直した。調査では、それぞれの項目の内容について学生がどれほど達成したかを 5 段階（5 ともそう思う、4 ややそう思う、3 どちらともいえない、

2 あまり思わない、1 全く思わない）で回答する方式とした。さらに、達成度の高かった（5 段階のうち 4 または 5 と回答した）項目については、そう思った具体的な場面や理由の記述を求めた。

「教職インターンシップの目的」に関する回答項目は、ア. 教師の意味や教師として働くことの意義が理解できた、イ. 学校における教師の役割に対する理解が深まった、ウ. 教師の職務全般に対する理解が深まった、エ. 教師が行う児童・生徒指導に対する理解が深まった、オ. 児童・生徒理解が深まった、カ. 学級経営に関する理解が深まった、キ. 特別活動に対する理解が深まった、ク. 教科指導に対する理解が深まった、ケ. 実践的な指導力を醸成することができた、コ. 学校現場の雰囲気を感じることができた、サ. この実習で体験したことを他の教職科目で活用することができた、シ. 教育実習に接続する活動として学校現場をあらかじめ理解できた、ス. 自らの教員としての適格性を把握する機会となった、セ. 地域や保護者との連携の重要性を理解できた、の 14 項目である。

2) 「自分自身の態度や理解の変容」の項目

2018年度に「教職インターンシップ」に参加した学生は、教職インターンシップの意義にかかわることだけでなく、「一人ひとりにじっくり向き合える指導にあこがれを感じた」「一人ひとりと真摯にかかわることで、発話ができない子どもが何を思っているのか、考えているのかわかるようになる」「困っていることをすぐに支援することは優しさではないことがわかった」など、自分自身の考え方や態度、子ども達への理解の変容について述べていた（古市・伊藤，2019）。本稿では、この視点についても、ふりかえり調査の項目を設定し、学生が自分自身の態度や理解の変容をどのように捉えているのかについて、検討することにした。

項目は、峯村ら（2019）の調査のうち「目的以外でもたらしている成果」として作成された 11 項目をもとに、a. 児童・生徒との接し方や児童・生徒と接する際の態度、b. 礼儀やマナーなどの態度、c. 気持ちの持ち方など、情緒面、d. 教師像の具体化など、キャリア意識、e. 気の配り方、目の向け方など、状況把握しようとする態度、f. 子どもの主体性の尊重など「教える」ばかりではないという意識、g. 体力面・精神面など、児童・生徒の心身上の大変さに対する理解、h. 自分自身が児童・生徒であったときとの違いへの気づき、i. 自分自身の不勉強に対する反省・学習への動機づけ、j. 子どもとずっと遊ぶ・話すなど、より積極的にかかわろうとする意欲、k. 叱り方や注意の仕方など、ネガティブな面での接し方に対する理解、とした。各項目について、向上した（低下した）

程度を5段階で自己評価してもらい、さらにどのような向上（低下）したのか、そのきっかけとなった理由や場面の記述を求めた。

3 結果

3.1 「教職インターンシップの目的」に関する項目について

3.1.1 達成したと回答した人数

「教職インターンシップの目的」について尋ねた14項目について、達成したと回答（5段階のうち4または5）した学生の人数が多い順に表1に示した。

7人全員が達成したと評価した項目は、ウ、教師の職務全般に対する理解が深まった、オ、児童・生徒理解が深まった、コ、学校現場の雰囲気を感じることができた、の3項目であった。次いで、イ、学校における教師の役割に対する理解が深まった、シ、教育実習に接続する活動として学校現場をあらかじめ理解できた、の2項目が5人であった。

一方、達成したと評価した学生が2人以下だった項目は、カ、学級経営に関する理解が深まった、ス、自らの教員としての適格性を把握する機会となった、キ、特別活動に対する理解が深まった、ク、教科指導に対する理解が深まった、の4項目であった。

表1 達成したと回答した人数

「教職インターンシップの目的」に関する項目	(人)
ア 教師の意味や教師として働くことの意義が理解できた	4
イ 学校における教師の役割に対する理解が深まった	5
ウ 教師の職務全般に対する理解が深まった	7
エ 教師が行う児童・生徒指導に対する理解が深まった	3
オ 児童・生徒理解が深まった	7
カ 学級経営に関する理解が深まった	2
キ 特別活動に対する理解が深まった	1
ク 教科指導に対する理解が深まった	1
ケ 実践的な指導力を醸成することができた	3
コ 学校現場の雰囲気を感じることができた	7
サ この実習で体験したことを他の教職科目で活用することができた	4
シ 教育実習に接続する活動として学校現場をあらかじめ理解できた	5
ス 自らの教員としての適格性を把握する機会となった	2
セ 地域や保護者との連携の重要性を理解できた	4

3.1.2 具体的場面や理由

「教職インターンシップの目的」について尋ねた14項目について、達成したと回答（5段階のうち4または5）した学生に「そう思った具体的な場面や理由」を尋ねたところ、項目ごとに以下のような回答が得られた。なお、（ ）には回答が得られた人数を記す。

ア. 教師の意味や教師として働くことの意義（4人）

4人全員が、障害児に対する授業、授業準備、かわり等を実際に観察・経験したことを挙げていた。例えば「重度肢体不自由児の食事場面、苦手な返事や楽器の指導場面などで一人ひとりの発達に合った内容・方法でできるように促し、子どもと一緒にリアクシ

ョンしたり、喜んだりする場面」などであった。

イ. 学校における教師の役割（5人）

4人が子どもの将来ために個々の能力、目標に応じてできることを増やそうとする教員の姿を挙げており、具体的には「子ども同士のコミュニケーションの仲介」「スモールステップの指導」「一人ひとり特性や障害の程度が全く違う個々の発達段階に合わせて、音の出る教材や、持ちやすい紐など、教材研究・教材開発する教師の姿」「良い授業を作り上げるために学ぶ姿勢や子ども理解」などであった。

2人が他職種や保護者との連携の重要性を挙げた。

ウ. 教師の職務全般に対する理解（7人）

7人全員が授業外の様々な職務や役割を挙げており、具体的には、「学習環境の整備」「移動の介助」「排泄の介助」「食事の補助」「清掃」「保護者との連絡」「体調管理」「学校運営業務の分担」であった。

授業や学習環境では、「個にあった授業（準備）」「一人ひとりに教員がつき、その子に合った教育支援」「安全確保の徹底」が挙げられた。

エ. 教師が行う児童・生徒指導（3人）

達成したと回答した学生が半数以下であり、「小学部では日常生活にかかわる活動、中高等部は自立を目指した技術」「手を握ったり触れ合ったりする」「個々に応じた指導」と、捉え方や感じる場面もそれぞれであった。

オ. 児童・生徒理解（7人）

7人全員が「担当クラスだけでなく多くの生徒と交流ができた」など、実際に様々な子どもとかかわったことを挙げている。具体的には、「歌が好きな子、すぐ座り込んでしまう子、動きがゆっくりな子など一人ひとりこだわることが違っていった」「重度重複障害のクラスでは、本当に様々な子どもがいた。かかわっていく中でもみんなそれぞれ繊細で、笑ったり声を出したりしてアピールしてくれる」「意思表示をさせること、また、それに気づき汲み取ることは、日頃から意思を読み取ろうと思って子ども達を観察していなければできない」など、一人ひとりの特徴を捉えようとする姿がみられる。

このうち2人は、「はじめはかかわり方がわからなかったが、児童の興味関心があるものを使ったり、先生に特徴を聞きながら寄り添えるようにかかわりを持つようにすると、話すことができるようになった」「最終日に近くなるほど、その生徒が、目線や声、指先、口角など、何をどう使って意思を表示してくれて、それが何を示しているのか少しずつ分かってきた」と、子ども理解が進んでいった様子を記述している。

カ. 学級経営（2人）

2人と少なかった。「〇〇な学級を目指しているな

ど、担任の先生から話を聞いた」「一人ひとりに役割が与えられていた」との回答があった。

キ. 特別活動（1人）

1人のみであり、「学級、学年の児童の発達段階にあわせて全員が活動できる活動内容を行っていた」ことを挙げている。

ク. 教科指導（1人）

1人のみであり「全体だけでなく一人ひとりに対しての目標や成功体験が必要だと感じた」とのことである。

ケ. 実践的な指導力の醸成（3人）

3人とも授業参加による経験を挙げている。「指導教員から、『あの声掛けは良くなかった』と言われてから、指導に使う言葉について考えるようになり、ポジティブで子どものやる気を引き出す声掛けや、時には待つ姿勢など、子どものモチベーションと自尊心を大切にしようという指導をすることが大切だと気づいた」「砂に触れたり、音を鳴らしたり、色が変わるのを見たり、足湯で温度を感じたりと、感覚を大事にした教材づくりがなされていた」との回答があった。

コ. 学校現場の雰囲気（7人）

7人全員が小学校との違いや特別支援学校でしか行われていないことを意識した記述であった。具体的には、「移動や排泄、食事の補助」「生徒と共に過ごす一日、先生の役割や学校への思い」「学年以外の先生との交流」「先生達が情報共有、協力、連携する姿」「看護師さんや保護者の方とのかかわり方」「発語と運動が難しい子どもが多い肢体不自由児の学校の空気をつくるのは教師。教師がとにかく笑顔で、たくさんの言葉を交わし、パワフルに動いていた」「教師が楽しそうだと、子ども達も楽しそうに見える」「トイレや水分補給の状況など、細かい情報を共有しあうことが大事」「とてもコミュニケーションが多く雰囲気が良い」等であった。

サ. 他の教職科目での活用（4人）

3人が大学での座学や模擬授業で実際の子ども達や教材をイメージしながら行うことができたという旨の意見であった。また2人は、特別支援学校に限らず、「子どもへの寄り添い方や先生同士のかかわり方」「小学校での学び」にも活用できたとのことであった。

シ. 教育実習に接続する活動としての学校現場（5人）

5人とも特別支援学校特有の様子や活動を挙げた。具体的には「窯業や、木工作業などいろいろな活動の体験」「一人ひとりにあった課題、教材、方法を用いること」「生活に関する経験」「朝礼での教師間の連携」「特別支援学校の授業イメージ」「学校での子ども達の活動の様子」「教員の視点」であった。

ス. 自らの教員としての適格性を把握する機会（2人）

2人から正反対の回答がみられた。「通常学級との違いに上手く対応できるかを確かめることができた」「実際の先生方のように支援をすることができず、自分の実力を感じた」とのことである。

セ. 地域や保護者との連携の重要性（4人）

4人とも連絡帳や話し合い、送迎時の声掛けによる「体調」「朝ご飯の量」「目覚めの良さ」「機嫌」などの保護者や教師との綿密な情報交換・共有を挙げている。「意思表示の難しい子どもの体調等を把握するため」や「保護者の方の安心していただ様子」からその重要性を理解したとのことである。

3.2 「自分自身の態度や理解の変容」に関する項目について

3.2.1 向上したと回答した人数

「自分自身の態度や理解の変容」について尋ねた11項目について、向上したと回答（5段階のうち4または5）した学生の人数が多い順に表2に示した。

7人全員が向上したと回答した項目は、a. 児童・生徒との接し方や児童・生徒と接する際の態度、e. 気の配り方、目の向け方など、状況把握しようとする態度、i. 自分自身の不勉強に対する反省・学習への動機づけ、j. 子どもとずっと遊ぶ・話すなど、より積極的にかかわろうとする意欲、の4項目であった。次いでf. 子どもの主体性の尊重など「教える」ばかりではないという意識、g. 体力面・精神面など、児童・生徒の心身の上の大変さに対する理解、の2項目が6人であった。

すべての項目において半数以上の学生が向上したと回答しており、11項目中10項目は5人以上であった。

表2 向上したと回答した人数

「自分自身の態度や理解の変容」に関する項目	(人)
a 児童・生徒との接し方や児童・生徒と接する際の態度	7
b 礼儀やマナーなどの態度	5
c 気持ちの持ち方など、情緒面	5
d 教師像の具体化など、キャリア意識	5
e 気の配り方、目の向け方など、状況把握しようとする態度	7
f 子どもの主体性の尊重など「教える」ばかりではないという意識	6
g 体力面・精神面など、児童・生徒の心身の上の大変さに対する理解	6
h 自分自身が児童・生徒であったときとの違いへの気づき	4
i 自分自身の不勉強に対する反省・学習への動機づけ	7
j 子どもとずっと遊ぶ・話すなど、より積極的にかかわろうとする意欲	7
k 叱り方や注意の仕方など、ネガティブ面での接し方に対する理解	5

3.2.2 きっかけとなった理由や場面

「自分自身の態度や理解の変容」について尋ねた11項目について、向上したと回答（5段階評価のうち4または5）した学生に「そう思うきっかけとなった理由や場面」を尋ねたところ、以下のような回答が得られた。以下に、6人以上が向上したと回答した6項目（a、e、f、g、i、j）について、それぞれ5人

ずつの回答を要約して示す。

a. 児童・生徒との接し方、態度

- ・「先生として」に加えて、自分らしくかかわると児童との壁がなくなることに気づいた
- ・児童に触れることはあまりよくないと考えていたが、手を繋いだりハイタッチをしたりしていくうちに、子どもが私に関心を向けてくれるようになり最終日にはずっと一緒に手を繋いでくれた
- ・生徒と同じ目線になって接しないと心を開いてくれないと強く感じた
- ・笑顔でハキハキと子どもに話しかけた方が、子どもは意思を表示した。そして私が楽しそうに話しかけると、子どももニコニコと笑顔を見せるので、できるだけ、笑顔で楽しそうに子どもと接したいと思うようになった
- ・どのような言葉がけをすればいいのか最初はわからなかったが、現場の先生方をお手本にして、イメージを膨らませることができた

e. 気の配り方、目の向け方など、状況把握

- ・健常児とかかわるときと違うところに気を付けなければならないので、次にどうするのか、違う場面ではどうしたらよいのかを以前より考えるようになった
- ・先生方は特定の児童だけでなく全体の児童に目を向けていて、誰かの異変にすぐ気づいていた
- ・自分が危なくないと思っても、それは勘違いだと気づくことが多かった。また、子ども達意思表示が小さいのでそこにも気を付けるべきだと感じた
- ・子ども達が頻繁に姿勢を変えたり、移動したりするたびに車椅子の乗降が必要になる。そのため、次の活動を予測して、姿勢保持いすやマットレス、車いす、靴などを準備したり、今使っているものを片づけたりするように気を配ることができた
- ・体が繊細な子どもに発作が起きないよう気を付けたり、車いすをぶつけないようという安全面にも常に気を配っており、すごかった

f. 主体性の尊重など「教える」ばかりではない

- ・子どもと一緒に活動する中で学ぶことがあると感じた
- ・職業校でいろいろな実技や体験を生徒がしていた。生徒自身楽しそうに、やりがいがあると述べていた
- ・どの先生も「教える」ことをせず生徒が興味関心を持って、主体となれる授業をしていて、生徒達も楽しそうに参加していた
- ・天井から吊るされた重りを引いて離し、ボーリングのピンを倒すという生活単元での活動。ある生徒は、ジーっと持ったまま重りを離さなかった。私は「離せない」のではないかとハラハラしていた。しかし、

彼女はずっとピンを狙っていたのである。先生方はそれをわかっていたのか、ずっと彼女が動作を起こすのを待っていた。特に障害のある子ども達に対しては、忍耐強く、待つ姿勢を大切にしなければ子どもの主体性は尊重できないのだと思った

- ・子どもの表出を待つことを大切にしていた

g. 体力・精神面など、児童・生徒の心身上の大変さ

- ・何が嫌だったのかわからないが、泣き出してしまう児童がいた
- ・手を動かすことだけでも、疲労していく様子を目の当たりにして、大変さを強く感じた
- ・自立活動で理学療法士と連携したマッサージを行わせてもらい、きめ細かい肌の小さな手足や、湾曲した背骨などに触れた。小さな手足は普段使わないから発達せず綺麗な肌なまなのだと先生から教えていただいた。この朝のマッサージには、その日一日を少しでも楽に過ごしてほしいという願いが込められているそうだ。生活するだけでも一体どれほどの負担を強いられているのかと考えるきっかけであった
- ・あきらめない強い情熱を持つことが大切だと感じた。
- ・命にかかわることが多く、先生方も常に気を引き締め、役割分担をしっかりと決め連携し教育を行っていた。すごかった。それにこたえるよう子ども達もがんばって授業を受けていた

i. 不勉強に対する反省・学習への動機づけ

- ・教育的なかかわりの持ち方がわからなかった。実際に教育現場で働いてみないとわからない場面が多かった
- ・窯業の体験などを通し、専門的な知識を何も知らなかったため、もっといろんな分野の専門的なことを学びたいと感じた
- ・児童の叱り方がわからなかった
- ・授業や補助など多くのことを経験させてもらう中で、何をすればいいのか、どういったことが必要なのかわからず、自分の知識や経験のなさが身にしみてわかった
- ・手遊びや音楽、絵本を読む技術など、子どもとかかわるときのきっかけとして活かせる知識・技能が圧倒的に足りていないと感じる場面が多々あった

j. 子どもと遊ぶ・話すなどより積極的なかわり

- ・自分から働きかけないと児童からはかかわりづらいし、障害を持つ子は特にそう感じる
- ・児童とかかわっていくうちに少しずつだが児童の成長を感じられた。階段を上ることが遅い児童に「とんとん」と声を出してリズムをとるとスムーズに登れるようになった
- ・上手く伝えられない分、しっかりとコミュニケーション

ンをとることが必要だと感じた。また、小さな意思表示を汲み取るためにもかかわらなければならない

- ・どんな声掛けをしたら喜ぶのか、どんな遊びを提示したら喜ぶのか、子ども達を観察するたびに考えることができた。しかし、積極的にかかわろうと思っても、期待した反応が得られなかったり、子どもの興味関心に当たるようなことが思いつかなかったり、自分の力不足も実感した
- ・実際にかかわっていく中で、子ども達の特徴や個性を見つけてることがあり、積極的に話しかけたり、かわったりすることが大事であると学んだ

4 考察

今回実施したふりかえり調査の結果から、「特別支援学校教職インターンシップ」特有の意義について探るため、まず、峯村ら(2019)の小学校教職課程で「学校インターンシップ」を実施する大学に対し行った調査結果との比較を行い、検討した。「教職インターンシップの目的」に関する項目においては、小学校教職課程、特別支援教職課程ともに「教師の職務全般に対する理解」が高かった。特別支援教職課程履修学生は小学校教職課程の大学が目的と考える以上に達成度が高い(30%以上差があるもの)項目は、「児童生徒理解」「学校現場の雰囲気理解」「教育実習の接続としての理解」「他教職科目での活用」「地域や保護者との連携」であった。一方、特別支援教職課程履修学生の達成度が低い項目は「生徒指導」「教科指導」であった。次に、「自分自身の態度や理解の変容」の項目であるが、特別支援教職課程の学生の達成度は全体的に高かった。中でも「児童生徒への目の配り方等状況把握しようとする態度」「子どもの主体性の尊重」「自身の不勉強の反省」「体力面、精神面の大変さの理解」の達成度が高くみられた。以上のことから、小学校教職課程との比較において、「特別支援学校教職インターンシップ」は、体系的な知識の修得よりもむしろ、教師の態度を含めた学校全体の雰囲気や障害児へのかかわり方といった個別的な指導の方法や自身の姿勢・態度の修得に成果が期待できると考えられる。

次に、達成度が高かった項目の具体的場面や理由の記述をみると、一人ひとりの障害や実態に応じた言葉かけ、実態に応じた教材、指導やかかわり方の方法、子どもとかかわる時の表情や態度について、さらに、教師間の連携や保護者への対応について多く言及されていた。このように、単に知識や理解にとどまらず、障害児一人ひとりを理解し、その成長を促すために重要なことを個別的な経験から学び、それを他科目に活用したり、自身に変容をもたらしたりするなど、学生のその後の意識や生活に影響を与えるところが、「特

別支援学校教職インターンシップ」特有の意義や成果と言えるのではないか。

また、障害児教育専修の学生を対象にした調査(田中ら, 2009)では、「障害児にかかわるための特別な技能が必要か?」の問いに対し、80%以上の学生が必要と回答しているが、特別支援学校教職インターンシップはこの「特別な技能」の修得にも大きな役割を果たしていると考えられる。

今回の調査では、「生徒指導」「教科指導」「特別活動」などの項目の達成度が低かった。これは、特別支援学校における教科指導、生徒指導、特別活動の指導内容やその取り扱いに関する知識や理解が学生に不足している結果と考えられる。今後は、特別支援学校におけるこれらの具体的な指導に関する内容を理解したうえで教職インターンシップに参加できるよう講義内容の充実を図り、学生がより目標達成に向けて取り組めるように検討していきたい。

引用文献

- 船橋篤彦(2014). 特別支援学校教員養成課程における実践的指導力の育成(1)ー学生の「学びのニーズ」の分析からー. 障害者教育・福祉研究10, 33-40.
- 古市真智子・伊藤佐奈美(2019). 特別支援学校教員養成における「特別支援学校教職インターンシップ」の実施報告と今後の課題. 中部大学教育研究19, 25-32.
- 教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会(2017) 教職課程コアカリキュラム.
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf (2020/09/01).
- 峯村恒平・枝元香菜子・渡邊はるか・藤谷哲・山本礼二(2019). 教員養成課程における「学校を体験する」活動の取り組みと成果ー各大学へのアンケートの結果から「学校インターンシップ」に向けてー. 目白大学高等教育研究第26, 81-88.
- 文部科学省(2017). 「教育職員免許状施行規則及び免許状更新講習規則の一部を改正する省令の交付について(通知)」.
https://www.pref.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page/_001/006/726/171127-01.pdf (2020/09/01)
- 田中敦士・神園幸郎・緒方茂樹・大沼直樹・片岡美華・雲井未歆・内田芳夫(2009). 特別支援教育の教員養成課程で学ぶ大学生の学習態度と技能習得の実態ー琉球大学学生への質問紙調査結果から. 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要 10, 31-40.

Meanings and Issues of Special School Internship in Teacher Training Program for Special Needs Education : Comparison with Elementary School Internship

FURUICHI Machiko^{*1} and ITO Sanami^{*2}

*1 Associate Professor, Department of Contemporary Education, College of Contemporary Education, Chubu University

*2 Professor, Department of Contemporary Education, College of Contemporary Education, Chubu University